インフルエンザウイルス

超高感度で検知

スディックス、診断法開発

鹿児島大学発のベンチャー企業、スディックスバイオテック（鹿児島市、代表取締役・隅田泰生鹿児島大大学院教授）はインフルエンザウイルスを超高感度で検知する診断法を開発した。低濃度のウイルスを検知でき、初期段階の患者も確認しやすくなる。新型インフルエンザにも対応。唾液（だえき）中のウイルスを30分以内に検査するシステムも今秋までに完成させ、空港の水際対策用などとして提案する。

ウイルスは細胞に感染する際、細胞表面の糖鎖（糖分子が複数個つながった分子）に吸着する。今回開発した検知法では糖鎖を直径15ナノ（ナは10億分の1）メートルほどの金ナノ粒子に固定化させたSGNP（糖鎖固定化金ナノ粒子）を作製。SGNPが吸着し重くなったウイルスが沈殿することで、濃縮されたウイルスが得られる。SGNPの価格は50回分で5万円。

これまで水際などで実施してきた簡易検査法は濃縮と詳細（PCR）検査に合わせて2時間程度かかるのも難点だった。

商品開発支援のトラスト（兵庫県加西市、児玉崇社長）と30分以内で自動検査できるシステムを共同開発している。